

四庫全書總目提要 陶淵明集 記注

宇賀神秀 一

はじめに

本稿は、四庫全書集部別集類に著録される東晋から劉宋初期を生きた詩人陶潜の「陶淵明集」の総目提要を訳出するものである。本文に対する訓読文については、既在原田種成氏の「調点本四庫提要」注¹に示されており、また本提要が主に提示する版本の伝流に言及したものは、陶澍の「諸本序録」注²、とりわけ橋川時雄氏の「陶集版本源流攷」注³や、郭紹虞氏の「陶集考弁」注⁴などに緻密な考証が見られる。近年でも松岡栄志氏の「陶淵明集」版本小識—宋版三種—¹や、「統」陶淵明集—版本小識—宋・元版二種—²注⁵があり、また袁行霈氏の「宋元以来陶集校注本之考察」注⁶などにおいて、陶集の版本の伝流については概ね明らかにされている。けれども陶集の版本の伝流に関して、提要がその草分けとしての存在であることは周知のことであろうし、また清

朝考証学者らが展開する考拠の一つ一つを追うことは、筆者を含む後学のものにとって今なお有益な示唆を有していることは言を俟たない。

訳出するに当たっては一九六五年に中華書局より刊行された「四庫全書總目」を底本として用いた。この版は浙江本の影印本で、殿本（武英殿本）、粵本（広東書局刊本）などの他の版と比較すると刻字が精確であることは既に近藤光男氏注⁷が指摘することくである。また、文淵閣本の書前提要と比較すると単なる異体字の問題として処理できない字句の異同が見えるので、それについては適宜指摘することとする。

本稿は、二〇一一年度、文教大学大学院にて開講された向嶋成美先生の研究指導において、筆者が担当した発表資料を基に整理を加えたものである。発表の席上、御批正、御教授賜った向嶋先生、また、同じく講義に参加して頂き、御批正、御教授賜った樋口泰裕先生、同学の

王連旺氏に特に記して深謝の意を示したい。

注1 汲古書院、一九九四年

注2 「靖節先生集」所収。なお、本稿での引用は四部備要本を用いた。

注3 文字同盟社、一九三二年四月、第三卷、後に「文字同盟」第三卷、汲古書院、一九九一年に復刻される。

注4 「燕京學報」第二〇期、一九三六年十二月、後に「照隅室古典文學論集」上編、上海古籍出版社、一九八三年に所収される。

注5 「漢文教室」第一七一號、一九九二年三月、同書、第一七三號、一九九二年一月に所収する。

注6 「陶淵明研究」北京大學出版社、一九九七年に所収される。

注7 「四庫全書總目提要「唐詩集の研究」、研文出版、一九八四年

訳注

以下、本文をIからIVの段落に分け、最初に原文、及び文字の校勘、次いで訓読文、現代日本語訳を考慮し、最後に注釈を付ける形で進めていく。

I

〔原文〕

陶淵明集八卷 内府藏本

① 晋陶潜撰。案②北齐陽休之序録③、潜集行世凡三本。一本八卷、無序。一本六卷、有序目、而編比顛亂、兼復闕少。一本為蕭統所撰。案古人編録之書④、亦謂之撰⑤。故文選日本皆題梁⑥昭明太子撰、而徐陵玉台新詠⑦序、亦⑧稱撰録麗歌凡為十卷。休之稱潜集⑨為統撰、蓋沿當日之稱。今亦仍其旧⑩文。亦八卷、而少五孝伝及四八目。四八目即聖賢詳輔録也。休之參合三本、定為十卷、已非昭明之旧。

〔校勘〕

- ① 書前提要、晋字上有臣等謹案陶淵明集八卷。
- ② 書前提要、無案字。
- ③ 書前提要、録字下有称字。
- ④ 書前提要、編録之書作選定之本。
- ⑤ 書前提要、撰作選。
- ⑥ 書前提要、無梁字。
- ⑦ 書前提要、詠字作咏字。

- ⑧ 書前提要、無亦字。
 ⑨ 書前提要、潜集作淵明集。
 ⑩ 書前提要、旧字作原字。

〔訓説文〕

陶淵明集八卷 内府蔵本

晋の陶潜の撰。案ずるに北斉の陽休之の序録に、潜の集の世に行わるるもの凡そ三本あり。一本は八卷、序無し。一本は六卷、序目有りて、編比顛乱して、兼ねて復た闕少す。一本は蕭統の撰する所と爲る。案ずるに古人の編録の書、亦た之を撰と謂う。故に文選の旧本皆梁の昭明太子撰と題す、而して徐陵の玉台新詠の序、亦た艶歌を撰録して凡そ十卷と爲すと称す。休之潜の集を称して統の撰と爲すは、蓋し当日の称に沿う。今亦た其の旧文に仍る。亦た八卷にして、五孝伝及び四八目を少くと。四八目は即ち聖賢群輔録なり。休之三本を参合して、定めて十卷と爲せば、已に昭明の旧に非ず。

〔現代日本語訳〕

陶淵明集八卷 内府蔵本 〔一〕

晋の陶潜の著。北斉の陽休之の「序録」には、次のように記されている〔一〕。陶潜の集は全部で三種類のテキストが世に通行している。一つのテキストは八卷で、序文が無い。もう一つのテキストは六卷で、序文と目録とが有り、編纂、配列が乱れていて、さらには欠けている作品もある。もう一つのテキストは蕭統によって編まれたものである〔三〕。古人の編んだ書物を見みると、やはり撰といっている。だから「文選」の古いテキストは全て「梁の昭明太子撰」と題しており、徐陵の「玉台新詠」の序文にもやはり「艶歌を撰録して全部で十卷とする」と称している。陽休之が陶潜の集を称して統の撰とするのは、恐らく、当時の呼称に沿うものであつたらう。今はその古い言い方に依る〔四〕。また八卷であり、「五孝伝」と「四八目」が欠けている、と。「四八目」とは「聖賢群輔録」である。休之は以上の三つのテキストを参照して、十卷に校訂したのであるから、既に昭明太子の編んだ古いテキストではない。〔五〕

〔訳注〕

〔一〕「陶淵明集」八卷は四庫全書、集部、別集類二に著録する。呉慰祖の「四庫探進書目」（商務印書館、一九三〇年）の補遺、武英殿第一次書目によれば、〔陶

淵明集」十卷。晋陶潜著。案四庫即據此本著錄。五孝伝以其賸而刪之。四八目則列於類書存目。故実存八卷云。詳見提要。」と見える。これによれば、四庫全書に整理、編纂された陶集（以下、四庫本とする）は、もともと十卷本であり、「五孝伝」を偽作として斥け、「四八目」を類書存目においているという。「四八目」とは本提要において後に指摘されるように、「聖賢群輔録」を指しており、提要の子部四十七、類書類存目一に著録されている。「五孝伝」は、四庫本において見えない「天子孝伝賛」、「諸侯孝伝賛」、「卿大夫孝伝賛」、「士孝伝賛」、「庶人孝伝賛」を指す。「四庫採進書目」には、四庫本が十卷本にもとづいて編纂されたことが示されており、橋川時雄氏の「陶集版本源流攷」によれば、李公煥本系統（李公煥本について橋川時雄氏は、元刻のものとして、「上海涵芬樓藏本（四部叢刊初編に景印）」及び「呉縡谷（焯）旧藏本」の二種があり、郭紹虞氏の「陶集考弁」では、更に「貴池劉氏玉海堂景印本」があると指摘する。本稿では、四部叢刊所収のものを用いた。以下、四庫本とする。）のテキストを底本として、以下、四庫本とするものの四庫本が具体的にどの李公煥本系統のテキストを底本としたかについては指摘されていない。ここでは先ず四庫本と四部本との相違する点について見ていき、

次いで四庫本と一致するテキストを明らかにしたい。

先ず四部本の巻首には、「補註陶淵明集総論」、「陶淵明集序」、「箋註陶淵明集目錄」を収録するのに対して、四庫本では、「提要」を収めるのを除いて、「陶淵明集原序」、「陶淵明集総論」を収録しており、名称及びそれらのおかれる順序が異なっていて、また目錄が見えない。更に両本の総論を比較すると、例えば、四部本は四庫本には収録する朱晦菴の二条、陸象山の二条、魏鶴山の一条は収録せず、四庫本は四部本には収録する東坡の「孔子不取微生高」の一条を収録せず、また論者の順序が異なっておかれている。

両本ともに巻一から巻六までは大きな異同はなく、巻一に「詩四言」、巻二より巻四に至って「詩五言」を収録する。巻五には両本ともに「雜文」を収め、巻六において四部本には、巻五と同様に「雜文」と、四庫本では「賦」と題して、両本共に賦を収録する。巻七より以下は大きく異同があり、四部本では、「伝賛」、四庫本では「賛疏」を収録する。巻八に四部本は「疏祭文」、四庫本では「祭文」が収録される。四庫本は以上全八巻の体裁を取るのに対して、四部本は巻九に「集聖賢群輔録上」、巻十に「集聖賢群輔録下」を収録する。

次に、詩文、注釈文、批文における四庫本と四部本と

の文字の異同を挙げていく。なお、四部本の文字を先に挙げ、次いで四庫本における文字の異同を挙げる。

卷一では、「停雲」序の「罇湛新醪」を「罇酒新湛」に作っている。卷二では「帰園田居」詩其三、第五句の「長」字を「愛」字に作り、「問來使」詩につけられた批文の西清詩話中の「篇」字を「節」字に作り、「遊斜川」序に付けられた注の「之晋」を「晋之」に作り、「於王撫軍座送客」詩、第七句の「四」字を「思」字に作り、第十五句の「月」字を「目」字に作り、批文では「休元」を「元休」に作り、「歲暮和張常侍」詩の第十五句に付けられた注、「酤一宿酒」が四部本では見えず、「悲從兄仲德」詩の第二句の「淚」字を「泪」字に作る。卷三に至って「始作鎮軍參軍經曲阿」詩の第十句、「綿綿」を「緜緜」に作り、その批文では「亦不能識此語之妙」とあるが、「能」字が見えず、「還旧居」詩、第一句に付けられた注の「已巳」を「乙巳」に作り、「庚戌歲九月中於西田穫早稻」詩の最後の句に対して四部本のみ「平声」と注されている。「丙辰歲八月中於下潁田舍穫」詩に付けられた批文中の「推」字を「惟」字に作り、「飲酒」詩其七、第八句の「越」を「趨」に作り、「述酒」詩の題に次いで付けられた注の「一本」を「宋本」に作り、「賁子」詩、第四句、「揔」を「總」に作り、「有会而作」詩の題下注、

「并序」が、四部本では見えない。卷四、「擬古」詩、其二、第十二句の後に付けられた注の「迂」字を「遷」字に作り、「雜詩」詩、其六に付けられた批文中の「李元中紀」を「李元宗紀」に作り、其十、第二句、「駛」字の「駛」字に作り、「詠三良」詩の十三句目の「因」字を「固」字に作り、第二十句、「茲」字を「法」字に作り、「詠山海經」詩、其一、第三句、「托」を「託」に作り、其四に付けられた批文中の「独」字を「潤」字に作り、其七の批文中の「栢」を「栢」に作り、批文に付けられた割注、「不」が「音邛」とあり、其十二、「縣」を「國」に作り、「口」を「日」に作り、批文中の「三篇」を「二篇」に作るなどである。

次に以上の相違について先人の研究成果に拠りつつ四庫本の底本を限定していくと、先に挙げた総論における論者の有無、及び異同について陶澍が李公煥本系統のテキストとして明の万歷丁亥（一五八七年）に刊行された休陽程氏本を挙げて「其総論中無東坡不取微生高一條而多朱晦菴二條、陸象象山二條、魏鶴山一條。不知程氏所見公煥本原是如、此抑從別本增刪。何燕泉本総論則諸條悉具。」と指摘している。先に述べた四庫本と四部本における「陶淵明集総論」の異同と一致していることから、四庫本の総論は休陽程氏本、及び何燕泉本と同様のものであることが分かる。

また「停雲」序の文字の異同について郭紹虞氏は、「此本大体固同李公煥本、然有以意、率改之処、如「停雲」詩序「饒湛新醪」、李公煥本以前諸本皆然、自此本改作「饒酒新湛」、於是楊時偉本、楊鶴本、潘璵本均從之。」と述べていることから、四庫本は休陽程氏本ないしそれ以降のテキストを底本したものと考えられ、陶澍の説と郭紹虞氏の説を併せて考えると休陽程氏本が四庫本と似た体裁を持つテキストであると考えられる。

休陽程氏本は、我が国宮内庁書陵部が所蔵しており、実際にその複写されたものを見ることが出来る。休陽程氏本は、每半葉九行十八字、四周双辺、双魚尾の体裁を取り、その表題に「陶淵明集」、卷首には「陶淵明集序」、「陶淵明伝」、「陶靖節集総論」、「陶靖節集目錄」がおかれ、総論の内容は四庫本と一致する。また卷一に「詩四言」、卷二より卷四に至って「詩五言」を収録して、卷五に「雜文」、卷六に「賦」、卷七に「伝贊」、卷八に「疏祭文」、卷九に「集聖賢群輔録上」、卷十に「集聖賢群輔録下」を収録する。四庫本の体裁とほぼ同じであるが、卷六の「賦」と題して賦を収録する点が四庫本と一致する。また先に挙げた詩、注釈、批文における文字の異同箇所、及び注釈の有無については、卷二の「帰園田居」其三、第五句の「長」字を四庫本と同様に作るが、他の

異同箇所は全て四庫本と一致している。

四庫本と休陽程氏本において、若干の文字の異同があり、また休陽程氏本とは一致せずに四庫本と一致する点もある。しかしながら表題、総論、また注の有無等から見れば、やはり休陽程氏本と一致する点が多く見られる。従って四庫本の編纂、及び抄写にあたり用いられたテキストは休陽程氏本であると思われる。

なお宮内庁書陵部所蔵の何燕泉本を見てみると、総論については一致するものの、休陽程氏本より改められたという「饒酒新湛」については一致せず、また先に挙げた異同箇所についても四庫本に従っていることから、休陽程氏本が参照としたテキストである可能性が高いものと思われる。

〔二〕陽休之（五〇九・五八二）、字は子烈、右北平無終の人。父は固、魏の洛陽の令となり、卒して後に太常少卿を贈られる。休之は才智に優れて風気があり、若くから勉学に努めた。文学を愛し、弱冠にして名声をほしいままにした。幽州刺史の常景と王延年とから招聘されて州主簿となる。隋開皇二年、罷任されて洛陽にて七十四歳で没した。〔北齊書〕卷四二、〔北史〕卷四七に伝が立てられている。彼の著作として、〔隋書〕経籍志、経部、

小学類に、「韻略一卷」、「新唐書」芸文志、史部、雜伝類には「幽州古今人物志三十卷」(「旧唐書」では、十三卷に作る)などがある。

〔三〕蕭統(五〇一・五三二)は、梁の武帝である蕭衍(四六四・五四九)の長子。字は德施、小字は維摩。天監元年(五〇二)十一月に皇太子となり、武帝の中大通三年(五三二)に没した。諡号を昭明という。時に東宮に書物が三万巻近くあり、名才が集まって文学の盛隆を極めたという。彼の伝は「梁書」巻八、及び「南史」巻五十三に立てられている。彼の著作は、「隋書」経籍志、集部、別集類に「昭明太子集二十巻」、また、集部、総集類に「文選三十巻」、「文章英華三十巻」、「古今詩苑英華十九巻」と見えるが、これ等の書は四庫全書、集部、別集類二に著録される。「昭明太子集」五巻の提要によれば宋末頃には既に散逸したと指摘されている。

提要では「其集」を「潜集」に、「両本」を「三本」に改めている。陽休之「序録」では次のように見える。

以為三本不同、恐終至亡失、今蕭統所闕並序目等、合為一帙、十巻。

陽休之は陶集を編纂した経緯として、蕭統本を含む三種のテキストがそれぞれ異なった体裁、また作品を収録

していることにより、一部のテキストのみに収録する作品が散逸してしまうことを恐れた。ゆえに蕭統本以外の「両本」を以て蕭統本に欠ける作品を補い十巻本に編纂したと述べている。それに対して提要が「両本」を「三本」に改めたのは、蕭統本を数えてのことであろう。

〔四〕「撰」字に対する注釈である。古い用例ではしばしば「撰」字と「選」字は区別せずに用いられている。注に引かれる「文選」では、例えば四部叢刊本、足利学校本の序文では、提要の指摘通り「撰」字に作っている。また引用されている「玉台新詠」序文の「撰録艶歌凡為十巻」において四部備要本では同様に「撰録」に作っている。四部叢刊本では「選録」に作っており、提要の指摘と異なるが同序文に見える署名には「陳尚書左僕射太子少伝東海徐陵孝穆撰」とあり「撰」字に作っている。

〔五〕「五孝伝」を収録する版は汲古閣本、四部本、また明の張溥「漢魏六朝百三名家集」所収の「陶彭沢集」などである。

汲古閣本の題下注には「一曰四八目」とみえる。しかしながら陽休之「序録」では「四八目」とのみ称しており、また後に見る宋庠「私記」、思悦「書後」において

も「四八目」とのみ称している。また汲古閣本、四部本、休陽程氏本では等しく「集聖賢群輔録」と題しており、「集」字が見える。

II

〔原文〕

又宋庠私記称、隋経籍志、潜集九卷、又云梁有五卷、録一卷、唐志作五卷。庠時所行、一為蕭統八卷本、以文列詩前。一為陽休之十卷本。其他又數十本、終不知何者為是。晚乃得江左旧本、次第最若①倫貫。今世所行、即庠称江左本也。

〔校勘〕

① 書前提要、若字作無。

〔訓説文〕

又た宋庠の私記に称す、隋の経籍志に、潜の集九卷と、又た云う、梁に五卷、録一卷有りと、唐志に五卷に作ると。

庠の時に行わるるは、一を蕭統の八卷本と為し、文を以て詩の前に列す。一を陽休之の十卷本と為す。其の他又た数十本あり、終に何れを是と為すかを知らず。晚に乃ち江左の旧本を得、次第最も倫貫なるが若しと。今の世に行るるは、即ち庠の江左本と称するものなり。

〔現代日本語訳〕

また宋庠の私記には【一】、「隋書」経籍志には陶潜の集九卷とあり、また梁の頃には五卷、目錄一卷があったという。【旧唐書】経籍志には五卷に作っている【二】。宋庠の時代に通行していたテキストは、一つが蕭統の八卷のテキストであり、文を詩の前においている。もう一つは陽休之の十卷のテキストである。その他にも数十本があつて、結局の所、何れのテキストが正しいのかは分からない。【三】おかれて江左の旧本を得て、その次第は最も源とその系譜をつらぬいて繋いでいると述べられている【四】。現在世に通行するものは、宋庠が江左本と称するものである【五】。

〔訳注〕

【二】宋庠（九九六・一〇六六）、字は公序、安州安陸の人、後に開封の雍丘に移った。庠は天聖（一〇二三・一〇三二）の初めに、進士に及第して、開封、試礼部皆第一、大理評事、同判襄州に拔擢された。弟は祁、庠と同時に進士第三名として及第する。応奉の時より祁とともに文章と学問を以て名声をほしきままにして、世に二宋と謳われた。宋庠の伝は「宋史」巻二百八十四に立てられている。また、彼の著作である「元憲集」三十六巻が、四庫全書、集部、別集類二六に著録されている。

「宋庠私記」は、汲古閣本に「本朝宋丞相私記」、休陽程氏本に、「宋朝宋丞相私記」、陶澍の「靖節先生集」諸本序録などに収録されている。

【二】「隋書」経籍志、集部、別集類に「宋徵士陶潛集九卷梁五卷、録一卷。」と見える。「唐志」は「旧唐書」経籍志を指す。宋庠「私記」には、「陶泉明集五卷」として唐の高祖李淵の「淵」を避諱しているが、例えば、百納本や殿本において、いずれも「陶淵明集五卷」に作っている。しかし、同「旧唐書」経籍志では「江智泉集」に作る例などがあることから、避諱として「淵」を「泉」に作ることは「旧唐書」の編纂当時としてはしばしばあったことと考えられる。

なお、「新唐書」芸文志では「陶潛集二十卷」とあり、これが「十卷本」の誤りであろうことは、既に橋川氏が指摘する所である。

【三】宋庠「私記」には、蕭統本について「合序伝誅等在集前为一卷、正集次之、亡其録。」と述べることから、陽休之「序録」の所謂蕭統本と同じ体裁であることが分かる。

また宋庠は「呉氏西齋録」に見える十卷本が陽休之本であるとし、より詳細にその体裁について言及している。「呉氏西齋録」は、初唐の呉兢が自身の藏書を纏めた藏書目録で、「新唐書」芸文志、乙部、目録類に「呉兢西齋書目録一卷」と見える。

なお、橋川氏は陽休之十卷本における録一卷を欠いたものが「隋書」経籍志の所謂九卷本であると想像している。

【四】「江左」は、現在の浙江省杭州のあたりを指し、宋代における木版印刷の中心地である。

「倫貫」という語は宋庠に先行する用例として、「魏書」巻一百八、礼志に一例ほど見えるばかりで、あまり用例を見ない語である。ここでは、「倫貫」という語につい

て検討を加える。「倫」字は「説文解字」卷八、人部に「輩也。従人、侖聲。一曰、道也。」とあり、「輩」はともがら、或いは「道」、物事の根本という。「貫」字は、卷七、母部に「錢貝之貫。従母、貝。」とあり、錢をつらぬいて繋ぐものを意味する。

次に宋の葉適の「未廩父墓誌銘」(「水心集」卷二十五、四庫全書に所収)には次のように見える。

余為言学之本統、古今倫貫、物變終始、所当究極。

ここにおける「倫貫」は、学問の「古」と「今」とにおける連続の流れ、及びそれらの源を指して述べている。また、「宋史」卷四百三十九、梁周翰の伝には次のようにある。

唐末喪乱、籍譜罕存、無所取則、周翰創意為之、頗有倫貫。

梁周翰(九二九・一〇〇九)、字は元褒。唐末の喪乱によつて宗室の系譜を作り、それは極めて筋の通るものであったと述べられている。

つまり宋庠は陽休之が編んだテキストには「倫」、陽休之以前の三種のテキストの源が見られ、「貫」、その系譜をつらぬき繋ぐテキストであるとして「倫貫」と述べているものと思われる。

【五】江左の旧本をもとに刊行された宋庠本は既に見られない。提要では現行の陶集のテキストが宋庠本ないし宋庠がおそくに得た江左旧本に由来すると指摘するのに対して、存目提要では「今本潜集為北齊僕射陽休之編」と述べる。これは本提要ではテキストという点に着目しているのに対して、存目提要の方ではその系統に収まるテキストのもともとの編者という点に着目しているからであろう。宋庠本が陽休之十卷本に基づくことは、宋庠自ら「私記」の中で述べていることであるし、また宋の晁公武「郡齋讀書志」でも「休之本出宋庠家云江左旧書」と指摘されている。

なお、【一】、【二】においてに四庫本は抄写にあたり、李公煥本系統のテキストを底本としたことは指摘したが、李公煥本が宋庠本ないし宋庠が得た江左旧本の系統にあると考えられることは、例えば何孟春が「世伝李公煥本、当是宋丞相所記江左旧書。」と指摘している通りである。なお、宋庠本を校勘の対象に用いて編纂された北宋刊本として思悦が刊行したテキストがあり、巻数などの問題から李公煥本を含む現行の陶集は、より直接的にはこの思悦本に由来するという指摘が、橋川氏、郭紹虞氏らによつてなされている。

なお【校勘】において指摘した通り、書前提要では「若

を「無」に作っているが、文脈の流れなどから見て誤りであろう。

Ⅲ

〔原文〕

然昭明太子去潛世近、已不見五孝伝、四八目、不以入集、陽休之何由統得。且五孝伝及四八目所引尚書自相矛盾、決不出於一手①、当必依託之文。休之誤信而増之。以②後諸本、雖卷帙③多少、次第先後、各有不同、其竄入偽作、則同一轍、實自休之所編始。庠私記但疑八儒、三墨二条之誤、亦考之不審矣。

〔校勘〕

- ① 書前提要、於作于。
- ② 書前提要、無以字。
- ③ 書前提要、帙作数。

〔訓説文〕

然れども昭明太子は潛の世を去ること近し、已に五孝伝、四八目を見ず、以て集に入れざれば、陽休之何に由りて統ぎ得たるや。且つ五孝伝及び四八目の引く所の尚書は自ずから相い矛盾すれば、決して一手より出でず、当に必ず依託の文なるべし。休之誤り信じて之を増す。以後の諸本は、卷帙の多少、次第の先後、各同じからざる有りと雖も、其の偽作を竄入して、則ち同一轍なるは、實に休之の編する所より始まる。庠の私記は但だ八儒、三墨の二条の誤りのみを疑う、亦た之を考うることに審らかならざるなり。

〔現代日本語訳〕

しかしながら昭明太子が生きていた時代は陶潛が世を去つてからさほど隔たつておらず、既に「五孝伝」と「四八目」を見なかつたので、撰集には入れなかつたのであれば、陽休之は何に拠つて収録できたのであろうか【一】。また「五孝伝」及び「四八目」の「尚書」を引用する個所は相互に矛盾しているので、一人の作者から出てきたはずもなく、必ずや陶潛の名に偽託した文章である【二】。陽休之は誤つて信じ込み、この二つを加えたのである。陽休之がこの二つの作品を加えて以後のそれぞれのテキ

ストは、巻帙の多少、次第がそれぞれのテキストによって異同があるとはいへ、そうした偽作が混入している点に閲して、同じ轍を踏んでいるのは、実に陽休之が編んだ時より始まるのである。宋庠の「私記」において、「八儒」、「三墨」の二条のみを偽作と疑っているのは、宋庠の考えが十分に及んでいないのである〔三〕。

〔訳注〕

〔一〕蕭統が生まれたのは淵明の没年である四二七年（劉宋、元慶四年）から七十四年後であるのに対し、陽休之が生まれたのは、淵明の没年から八十二年後とやや蕭統に遅れる。

〔二〕「五孝伝」と「四八目」が偽作であるという見解は、存目提要に詳しい。存目提要には、次のようにある。

「五孝伝」引「孝乎惟孝、友于兄弟」之文、句説尚從包咸註、知未見古文尚書。而此錄四岳一條、乃引孔安國伝、其出兩手、尤自顯然。至書以「聖賢群輔」為名、而魯三桓、鄭七穆、晋六卿、魏四友、以及仕莽之唐林、唐遵叛晋之王敦、並列簡編、名実相違、理乖風教。

〔五孝伝〕に「孝乎惟孝、友于兄弟」の文を引きて、句説尚お包咸の註に従うは、未だ古文尚書を見ざるを知る。而るに此れ四岳の一條を録して、乃ち孔安國の伝を引くは、其れ兩手より出ずること、尤も自ずから顯然たり。書するに「聖賢群輔」を以て名と為すに至りては、魯三桓、鄭七穆、晋六卿、魏四友、以て莽に仕うるの唐林、唐遵、晋に叛くるの王敦に及び、簡編を並列するは、名実相違、理乖風教に乖く。）

〔三〕宋庠が「八儒」、「三墨」を後人の偽作と見る疑念は「四八目」の末文に陶潜自身のことばとして、「書籍所載、及故老所伝善惡、聞於世者蓋盡於此矣。」とあるにも拘わらず、「八儒」、「三墨」がその後におかれていくという点である。従つて宋庠の疑念と存目提要の指摘は異なるものであり、宋庠は、「五孝伝」と「四八目」自体は偽作とは見ていない。

〔四〕

〔原文〕

今四八目已經睿鑑指示、灼知其贋、別著錄於①子部類書而詳弁之。其五孝伝文義庸淺、決非潛作。既与四八目一時同出、其贋亦不待言。今並剛除、惟編潛詩文、仍從昭明太子②為八卷。雖梁時旧第今不可考、而黜偽存真、庶幾猶為近古焉③

④

〔校勘〕

- ① 書前提要、於作于。
- ② 書前提要、有所定盤三字。
- ③ 書前提要、乾隆四十六年十月恭校上
- ④ 書前提要、總纂官臣紀昀臣陸錫熊臣孫士毅總校官臣陸費墀

〔訓詁文〕

今四八目は已に睿鑑の指示を経て、灼らかに其の贋なるを知れば、別に子部の類書に著録して詳らかに之を弁ず。其の五孝伝は文義庸淺なれば、決して潜の作に非ず。既に四八目と一時に同に出づれば、其の贋なること亦た言を待たず。今並びに剛除し、惟だ潜の詩文のみを編し、

仍お昭明太子に従いて八卷と為す。梁時の旧第は今考う可からずと雖も、偽を黜けて真を存すれば、猶お古きに近きと為すに庶幾からん。

〔現代日本語訳〕

現在「四八目」は既に陛下が御指示されたことにより、明らかに偽作であることが知られているので、別に子部の類書に著録し、詳細に解説した。「一」「五孝伝」は文が平凡で浅く、絶対に陶潜の作品ではありえない。また「四八目」と「五孝伝」が同時に現れたのであれば、偽作であることは言うまでもない。今併せて削除して、ただ陶潜の詩文のみを編集して、やはり昭明太子に従って八巻本とした。梁の時代の古い次第は現在考えることは出来ないが、贋作を斥けて真作を収録したので、なお古い形に近いものと考えてよいだろう。

〔訳注〕

〔一〕「睿鑑」は天子の考察。浙江本、殿本、書前提要において等しく本文よりも二段上に記すことによつて天子の考察に対して敬意を表す。提要において同様の例とし

て、「容裁」、「容算」、「容慮」などが見え、また「容」は「聖」と同義的に用いられ、「聖訓」「聖裁」などが見える。

「五孝伝」と「四八目」を偽作とする見解は夙に曾集の自序に「与夫五孝伝以下四八目雜著、所為犯是不臆、非敢有所去取、直欲嗜嗜真淳、吟詠情性、以自適其所適。」と見えることが、「四庫全書総目提要補正」(胡玉縉、中華書局出版、一九六四年)所引の瞿氏目錄によって指摘されている。

(文教大学大学院 言語文化研究科

地域言語文化研究コース 修士課程一年生)

歌舞伎鑑賞教室

去年の六月に国立劇場に行き、初めて歌舞伎を鑑賞しました。その日の演目は「義経千本桜」というものでした。今回観たのは義経千本桜の中で「四の切」という場面です。私の想像していた歌舞伎とは大きく違ったものでした。内容は、義経の部下である佐藤忠信に化けた源九郎狐という狐の子どもが、義経の恋人の静御前のもつ自分の両親の皮で作られた「初音の鼓」を奪って付き従い、最後にはその親子愛に心打たれた義経から初音の鼓を手えられるという話です。狐の親子愛を描いた作品で、物語の内容も分かりやすく初めて歌舞伎を観た私も十分に理解できました。特徴的だったのが狐の演技で、「狐詞」という独特のセリフの表現、激しい動きや早着替えそして舞台の特殊装置を使った登場など、とても工夫された演出で、本当に狐なんじゃないかと思わせるような素晴らしい演技でした。

そして、国立劇場の舞台にあけていただくということでも貴重な体験もさせていただきました。舞台の上で、舞台効果や役者さんの衣装や隈取という顔の化粧の説明を聞き、見得や女性の演じ方などを教えていただいた。国立劇場の花道を歩いたり舞台上のセリから舞台の下に降りるという経験は、このような機会でない絶対には経験できないものなので今回歌舞伎鑑賞教室に参加して本当に良かったと思います。

自分くらの年齢の人には歌舞伎に触れる機会があまりなく、歌舞伎は難しいものだというイメージがありますが、全くそんなことはありませんでした。歌舞伎を観たことが無いという人には、歌舞伎鑑賞教室はとていいきっかけになると思います。

(国語一年 中山峻太郎)